

# 助言行為における非難の回避

## —「概念分析の社会学」としての「会話分析」—

千葉大学大学院 三部 光太郎

### 1. 目的

会話分析 (conversation analysis、以下「CA」) と呼ばれる、主に言葉のやり取りの録音・録画 (以下「会話データ」と呼ぶ) を資料とする一群の研究は、「さまざまな言語的やりとり (talk-in-interaction) において、人々が理解可能な形で行為を生成していく方法を記述すること」(串田 2006:188, 強調は引用者による) を目的としている。その意味で CA は、Weber 以来の、「人びとの行為の理解」という社会学的課題を、最も重く受け止めてきた研究群のひとつと言えるだろう。本報告は、会話データの分析によってもたらされた知見を、「概念分析の社会学」(酒井ほか編 2016) の自己理解に即して特徴づけることで、CA が「人びとの行為の理解」という課題に、どのような仕方で行き届くものなのかを改めて明確化する試みである。

### 2. 方法

キャリア・カウンセラー1名と、就職や転職など、キャリアについての悩みを抱えている20代のクライアント4名に協力を得て収録した、キャリア・カウンセリングの録音・録画データ(初回面接、4ケース)を分析対象とし、カウンセラーからクライアントへの「助言」行為がどのように達成されているのかを分析する。

### 3. 結果

カウンセラーによる「助言」行為と理解可能な発話は、クライアントが表明した困難の解決手段と聞きうるような、未来の行動の選択肢についての言及を含むものである。そうした発話は、クライアントが為すべき行為についての指示として聞かれうるという点において、クライアントの実際の状況によっては、クライアントに対する「非難」として聞かれる可能性を孕んでいる(たとえば「既にしていて然るべきことを - (まだ) していない」ことを露わにすること)。

そこでカウンセラーは、1) クライアントに対して助言の前置き (pre-advice) として理解可能な質問を行うこと (ex. 「(解決策の候補) X をした/利用したことはありますか?」)、2) 助言と聞きうる発話の組み立てにおいて、クライアント自身にとっても自明でありうる選択肢を、クライアントが気づいていない観点から提示すること、という2つの方法によって、自らの発話を「非難」として理解される可能性を回避しつつ、助言を達成していた。

### 4. 結論

本報告で行った分析は、「どのような言語表現を・誰に対して・どのような発話上の前後関係(位置)において用いれば、「助言」行為をすることができるのか(あるいは「非難」してしまうことになるのか)」について、私たちが普段は言葉で表現せずとも確かに使用している一般的な知識 (= 助言行為の「概念」) を思い起こさせてくれる。録音・録画記録を資料とする分析は、特に「助言の前置き」のような日常語には必ずしも対応する言葉を持たないにもかかわらず、私たちが複雑な振る舞いのなかで他と区別している行為概念の解明に有用である。その意味で CA の知見は、私たちの社会生活を、より体系立った仕方で見通すことを可能にしてくれるだろう。

### 文献

串田秀也. (2006). 「会話分析の方法と論理—談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」伝康晴・田中ゆかり編, 『講座社会言語科学 第6巻 方法』ひつじ書房, pp.188-206.  
酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編, 2016, 『概念分析の社会学 2—実践の社会的論理』ナカニシヤ出版.